

前提の投射における left-right asymmetry と

「P かもしれない」について

山森 良枝

Yoshie Yamamori

同志社大学

Doshisha University

yy080707@gmail.com

Abstract

Some theory assumes that the presupposition triggered by an expression E is generally satisfied by information that comes before E in the sentence or discourse. This is dubbed “left-right asymmetry”. But several data show that presupposition projection is not always taken to be computed “from left to right”. This paper addresses the syntax and semantics of the Japanese sentence final expression “P(roposition)+*ka-mo-sire-nai*”, which is composed of *ka*(or), *mo*(too/and) and *sire-nai*(not know), and examines the semantic relationship between these particles and the immediately larger context. The analysis revealed some interesting findings suggesting some logical characteristics of the information structure of “*ka-mo-sire-nai*”. The results help to clarify the way in which complex sentences in the problematic data inherit the presuppositions of their parts.

Keywords

“~ *ka-mo-sire-nai*”, Presupposition projection, Left-right asymmetry, Japanese

1 はじめに

ある表現 E の持つ前提(presupposition)は、動的意味論等において、E の後続情報ではなく先行情報に含まれるという left-right asymmetry を示すことが主張されており、これを前提投射のコアな特徴とする Incremental Theory が提唱されてきた。しかしながら、次

のような例では、left-right asymmetry が必ずしも示されているわけではない。

(i) # John vacationed in Paris or in France.

(ii) # John vacationed in France or in Paris.

そのため、Chemla & Schlenker(2012 : 180)によれば、Incremental Theory に加えて、次のような 3 つの理論が提案されている、と言う。

(iii)a. Incremental Theory: Left-right

asymmetry がコアな特徴である。

b. Strict Symmetric Theory: Left-right

asymmetry はコアな特徴でない。

c. Mixed Theory: Left-right asymmetry

は若干のコストで乗り越えられる傾向(bias)である。

本論では、「か」に「も」が後続する「P かもしれない」を対象に、その意味構造を明らかにし、これを糸口に、前提の投射の問題についても考察する。そして、その考察結果から、left-right asymmetry が支持されることを提示する。

2 「かもしれない」の統語構造

前提の投射に関する問題について議論する前に、「P かもしれない」の構造について少し概観しておこう。

日本語では、命題を表す部分に後続して命題についての話者の態度を表す周辺部分が豊富な構造を持つことが知られている((南、1974, 1993)など)。本論で取り上げる「かもしれない」もこのような周辺部分を形成する形式の一つであり、『デジタル大辞泉』によると《断定はできないが、その可能性があることを表す》という意味を持つとされる。このことは、「かもしれない」が、南の C 段階の要素に相当する話者の判断を表す副詞類のうち、比較的高い蓋然性を示す「きっと/たぶん/おそらく」とは共起できないが、低い蓋然性を表す「ひょっとして/もしかしたら」とは共起できる、という事実から確認できる。

- (1)a. {ひょっとして/もしかしたら/?たぶん/
?おそらく/*きっと}太郎は来るかもしれない
b. {たぶん/きっと}太郎は来ないと思うが、
もしかしたら、来るかもしれない

(1a)は、(1b)のように、「太郎は来る」と対立関係にある(あるいは、交替可能な)命題「太郎は来ない」と等位接続することができる。このことは、「P かもしれない」が、 $Q \vee P$ という選言を含んでいると考えられることを示唆している。次の(2)~(4)も $Q \vee P$ という命題の選言を含む。したがって、(2)は、太郎が来ることと来ないこと、(3)は、洋子が走ったことと転んだことのどちらにも可能性があること、そして、(4)は、洋子か花子のどちらかが走る可能性があることを表している。

- (2) 太郎は[来るか] (あるいは) [来ないか] かもしれない
(3)a. 洋子は走ったかもしれないし、転んだかもしれない
b. 洋子は[走ったか] (あるいは) [転んだか] かもしれない
(4)a. 洋子が走るかもしれないし、花子が走るかもしれない
b. [洋子が走るか] (あるいは) [花子が走るか] かもしれない

実際の使用においては、(2)~(4)の前半に現れる (P と対立関係にある) 命題 Q が明示的に与えられていなかったり、「かもしれない」の「しれない」が省略されたりする場合がある。(1a)は前者の例である。しかし、それらの場合においても、受け手は、コンテキストから、基本的に(2)~(4)と同等の解釈を得ることができると考えられる。

それでは、このような意味を持つ「P かもしれない」は統語的にはどのような構造を持つのだろうか。答えを先取りして言えば、(2)~(4)のような例に含まれる $Q \vee P$ という選言を構成する命題の Q と P は、統語的には、「か」を用いて並列される時制時句 (TP) が等位節を形成し、否定辞を含む動詞句「しれない」が「か」よりも上位にある、と仮定してよいと思われる。岸本(2012)を参照して考えてみよう。

たとえば (5)、(7)の a と b の対立が示すように、「ます」のような丁寧表現や助動詞の「みたいだ」は、時制辞の右側に現れる。(2) タイプの等位構造においても、(6)(8)の a と b の対立が示すように、「ます」「みたいだ」は等位節の外側にしか現れ得ず、(2) タイプの等位構造では、時制辞句の等位節が形成されてい

ることが確認できる。

(5)a. *太郎は来ますかもしれない

b. 太郎は来るかもしれません

(6)a. *太郎は[来ますか][来ませんか]もしれな
い

b. 太郎は[来るか][来ないか]もしれません

(7)a. *洋子は転んだみたいだかもしれない

b. 洋子は転んだかもしれないみたいだ

(8)a. *洋子は[走ったみたいだか][転んだみた
いだか]もしれない

b. 洋子は[走ったか][転んだか]もしれな
いみたいだ

また、(9a.b)が示すように、「よ」「ね」のよ
うな終助詞は主節にしか現れないことが知られ
ており、さらに、(10)のaとbの対立が示すよ
うに、(2) タイプの等位構造においても、これら
の要素は等位節の外側にしか現れ得ない¹。こ
の事実から、(2) タイプの等位構造では、時制
辞句の等位節が形成されていることが確認で
きる。

(9) a. * 花子が走る{よ/ね}かもしれない

b. 花子が走るかもしれない{よ/ね}

(10)a. * [洋子が走る{よ/ね}か][花子が走る{よ
ね}か]もしれない

b. [洋子が走るか][花子が走るか]もしれ
ない{よ/ね}

以上から、「P かもしれない」は(2)タイプの
等位構造を持つと考えることができるだろう。
そして、このように考えるなら、「P かもしれ

ない」は、次のような構造を持っていると考
えられることになる。

(11) [_{IP} pro [_{Coord} [_{TP} SUBJ....V KA] [_{TP}
SUBJ....V KA]] MO KNOW-NEG
PRESENT]

つまり、「P かもしれない」の一つ目の「か」
が等位接続詞として機能し、副助詞として機
能する二つ目の「か」に副助詞/係助詞の「も」
が後続して²、「しれない」の補文が形成され
ている。ここでは、否定辞を含む「しれない」
が「か」よりも上位にある。ということは、
(11)は、全体として、 $\neg \text{KNOW} (Q \vee P)$ 、即
ち、QもPも成り立たつのか、QかPの一方が成
り立たつのか、分らない、つまり、Pが成り立
つ可能性を排除できない、という意味を表し
ているということである。

3 「かもしれない」の意味構造

3.1 選言の読み

このように、「P かもしれない」は、P と Q
の命題の選言を示唆し、P が成り立つ可能性
を排除できない、という読みを持つ。しかし
ながら、先述したとおり、常に P と対立関係
にある命題 Q が明示的に与えられているわけ
ではない。たとえば、先の(1a)は、 $Q \vee P$ と
いう命題の選言の一方を欠く文だが、命題の
選言が与えられている(2)とほぼ同じ読みを持
つと言ってよい。このような(1a)タイプの文に
命題の選言を導入するトリガーとなる要素は

² (i)(ii)のように、副助詞の「か」には「も」
以外の副助詞も下接して補文を形成する。

(i) 太郎が来るか、来ないかはわからない

(ii) 洋子は走ったか、転んだかしかない

¹ なお、次のとおり、主語尊敬語化をする表
現は等位節の内部に生起することができる。

a. 先生は転ばれたかもしれない

b. 先生は[走られたか][転ばれたか]もしれない

何だろうか。当該命題 P と対立関係にある命題 Q が示唆されるためには、少なくとも P と Q を元とする命題集合を前提として、それらを導入する機能を持つ要素が文末形式「かもしれない」の中に存在していなければならない。論理的に可能性のある要素としては、対照集合を導入する機能を持つ「か」と「も」しかないように思われる。しかし、補文を形成する「か」だけを含む(11a)や「も」が「か」に先行して生起する(11b,c)に「太郎が来る」可能性はある、という読みは生じない。

- (11)a. 太郎が来るかしらない
 b. 太郎が来もするかしらない
 c. 太郎も来るかしらない

「* P もかしらない」という形態は認可されないの、「も」が「か」に先行するには、(11b,c)のような形にするしかないように思われる。ところが、(11b)は太郎が「来る」以外の行為をするのかどうか分からない、また、(11c)は太郎以外の人があるのかどうか分からないという解釈になり、 $Q \vee P$ という命題の選言を設定することはできないことが分かる。したがって、 $Q \vee P$ という命題の選言の設定に関係しているのは、「か」単独でも「も」単独でも、さらには「もか」でもなく、「か」が「も」に先行する「かも」の連続体だということになる。では、「か」は「も」になぜ先行しなければならないのだろうか。

3.2 「も」と「か」

3.2.1 前提導入表現の「も」

Shimoyama(2006)では、「 X も」の「も」は、統語構造上 c -統御する位置にある要素 X を量

化する全称量化子である³との観点から、「誰/何/いつ」などの疑問詞を含む疑問詞疑問文は可能な答の集合として $\text{Answer-Set}(q)$ を構築するという Hamblin Semantics(1973)を援用して、「も」の意味を(12)、また、「 X も」の意味を(13)のように規定している。

(12) $MO = \lambda P \lambda Q \forall x [P(x) \rightarrow Q(x)]$, where

$x \in D_e$, and $P, Q \in D_{\langle e, t \rangle}$

(13) $[[X]mo] = \lambda Q \forall x [[X](x) \rightarrow Q(x)]$, of type $\langle \langle e, t \rangle, t \rangle$

直観的に言うと、「も」の意味は $[P(x) \rightarrow Q(x)]$ を満足する x の集合である。この x の全称量化子としての「も」の意味は、内包を考慮すると、(12)のように翻訳される。ここで、 x はタイプ $\langle e \rangle$ (個体)の変数であり、 P, Q はタイプ $\langle e, t \rangle$ (個体の集合)の変数である。次に、(12)の定義を用いて「 X も」を翻訳すると、 $\lambda Q \forall x [P(x) \rightarrow Q(x)] (X')$ になる。 P に適用される項の X' を代入すると(13)の式を得る。 $[[X]mo]$ のタイプは $\langle \langle e, t \rangle, t \rangle$ (個体の集合の集合)、つまり、一般量化子のタイプである。

したがって、(12)によれば、「も」は最初に NP と結合し、その後、 VP や AP と結合されることになる。この考えに従うと、「どの教師

³ 例えば、(ia-c) (iia-c) の例はどれも、「も」が全称量化子として不定語を量化する読みを持つ。

- (i) a. どれもおもしろい
 b. どの本もおもしろい
 c. どの先生が書いた本もおもしろい
 (ii) a. どれもおもしろくない
 b. どの本もおもしろくない
 c. だれが書いた本もおもしろくない

「も」の制限節項として前提を構成している、ということになる。以上を頭に置いて、今度は Szabolcsi(2015)の提案する「か」/「KA」と「も」/「MO」の意味分析をみてみよう。

- (14)a. $\forall x[\text{book}(x) \rightarrow \text{interesting}(x)]$
 b. $\forall x [\text{teacher}(x) \rightarrow \text{interesting}(\text{ty}[\text{book}(y) \ \& \ \text{written by}(x)])]$

つまり、「も」は、統語構造上「も」の姉妹位置にある構成素が表す P-集合を全体にわたって全称量化する一般量化子であり、統語構造上「も」と姉妹位置にある要素 X は制限節項として前提を構成し、それを除いた文の残りが存在閉包(焦点)を形成する、と考えるのである。

以上を踏まえて、ここでの X は任意のタイプを表し、X の指示対象である前提集合は当該文脈によって規定されると仮定すると、「も」の前提導入表現としての側面を統一的に扱うことができるようになる。この考えをそのまま「Pかもしれない」に適用できるわけではないが、「Pかもしれない」の分析の出発点とすることにしよう⁴。

⁴ なお、「X も」が全称量化表現であるかどうかは、次のようなテストによって確認できる。例えば、英語では、(I) の a, b のように、全称量化表現だけが *almost* や *absolutely* などの修飾語や例外を表す句と共起できる、と言われている。従って、「X も」が全称量化表現であれば、これらの副詞と共起できるはずである。実際に、見てみると、(I a, b) (II a, b) が示すように、「不定語+も」や「不定語+でも」の「(で) も」も、*almost* や *absolutely* に対応する日本語の「たいてい/絶対に/完全に/まったく」などの副詞や例外句と共起することができる。このことから、「も」が全称量化子としての特性をもつことが分かる。

この考えに従うと、 $Q \vee P$ という命題の選言は、「も」の制限節項として前提を構成している、ということになる。以上を頭に置いて、今度は Szabolcsi(2015)の提案する「か」/「KA」と「も」/「MO」の意味分析をみてみよう。

3.2.2 「KA」 vs. 「MO」

Szabolcsi(2015)は、「KA」「MO」⁵について、「KA」の役割は存在量化もしくは選言と、また、「MO」の役割は全称量化もしくは連言と各々関係する、と言う。前者は束論(lattice theory)における結び(join)、後者は交わり(meet)のそれぞれ特別なケースであり、さらに、結びと交わりは、半順序集合の下限と上限として双対的な関係にあるとし、「KA」は結び、「MO」は交わりを表す、とする。ただし、「KA」と「MO」は結びや交わりを表す演算子を具現化したものではなく、その意味は「KA」「MO」のホスト X が生起するより大きな構造の意味に付随すると主張する。すなわち、

... Instead, MO and KA impose semantic requirements that are satisfied when their contexts

- (I) a. 彼が書いたどの論文も絶対におもしろい
 b. 彼が書いたどの論文もそれ以外はおもしろい
 (II) a. ジョンは誰にでも {たいてい/絶対に} 話しかける
 b. ジョンは誰にでもスーを除き話しかける

⁵ Szabolcsi(2015)は、日本語の副助詞である「か」「も」を大文字のアルファベットで記した「KA」「MO」を、(先行研究で一定の同一機能を示すことが知られている)様々な言語の particle のクラスの名前として使用している。

are interpreted, respectively, as the meet (greatest lower bound) and the join (least upper bound) of the contribution of their hosts and something else.

ということである。Szabolcsi では、「KA」/「MO」のホストの $[[X]]$ とそれを含むより大きな構造 $[[Y]]$ は命題のタイプを取ると仮定され、 $[[X]]$ と $[[Y]]$ の間に(15 a,b)に基づいた論理的関係が成立することが主張されている。この関係を一般化したものが(16)である。

- (15) a. If c is the join (least upper bound) of a and b , then $a \leq c$ and $b \leq c$.
b. If c is the meet (greatest lower bound) of a and b , then $c \leq a$ and $c \leq b$.

- (16) My “host proposition” entails/is entailed by an “immediate context proposition”.

(Szabolcsi, 2015)

言い替えるなら、「MO」と「KA」は以下のような使用条件を持つということである。

- (17) MO requires that another proposition parallel to $[[X]]$ holds in $[[Y]]$.

(Szabolcsi, 2015)

- (18) KA requires that the alternatives in $[[X]]$ be preserved and boosted in $[[Y]]$.

(Szabolcsi, 2015)

したがって、「MO」は $[[Y]]$ が $[[X]]$ の交わり(上限)である場合に、また、「KA」は $[[X]]$ が $[[Y]]$ の結び(下限)である場合に、それぞれ認可されることになる。(19)は、上の認可条件を簡潔にまとめたものである。

- (19) Let X be the expression hosting MO/KA, and Y the immediately larger context,

a. MO requires $[[Y]] \leq [[X]]$

b. KA requires $[[X]] \leq [[Y]]$

つまり、「MO」/「KA」は抽象的な演算子ではなく、ホストとそれを含むより大きな文脈の間にある種の意味論的關係が保持されているかどうかをチェックする形式にすぎない、ということである。このような考えに立脚すれば、従来、全く別のものと見なされてきた (Shimoyama, 2006) 日本語の「誰も」の「MO (every/any)」と「太郎も」の「MO(too/even)」を統一的に扱うことが出来ると Szabolcsi は述べている。

したがって、たとえば花子と太郎だけから成る世界を仮定すると、(20)が成り立つのは $[[\text{花子が来る}]]$ と $[[\text{太郎が来る}]]$ を下限として含む(21a)の $[[Y]]$ が設定され得る場合であり、 $[[\text{花子が来る}]]$ と $[[\text{太郎が来る}]]$ を上限とする(21b)の $[[Y]]$ が設定される場合ではないことになる。

- (20) 花子か太郎が来る

- (21)a. $[[Y]] = [[\text{Hanako comes}]]$ $\cup$ $[[\text{Taro comes}]]$

$$= \{ \Phi, \{h \sim t\}, \{ht\}, \{h \sim t, ht\}, \{t \sim h\}, \{t \sim h, ht\} \}$$

- b. $[[Y]] = [[\text{Hanako comes}]]$ $\cap$ $[[\text{Taro comes}]]$

$$= \{ \Phi, \{ht\} \}$$

同じ文脈に冒頭の(1a)「太郎が来るかもしれない」を置くと、「も」は $[[\text{太郎が来る}]]$ と交替可能な命題を示唆し、それらを元とする(21a)の $[[Y]]$ を必要とするので、結果的に、

(22)「か」と「も」は、[[Y]]を介して、裏返し
の関係にあり、どちらも(21a)の[[Y]](が
成り立つ文脈)を前提として持つ、

ということになる。

4. 前提の投射構造と「も」

英語の *too* やフランス語の *aussi* も、日本語
の「も」同様、前提導入機能を持つことが知
られており、いずれも後続情報に生起して、
先行情報から後続情報への前提の投射を引き
起こす引き金としての役割を担う。そのため、
(自身が引き金として導入する前提を含む)
先行情報を必要とする、とされる。さらに、
Chemla and Schlenker(2012) によると、
too(=*aussi*)には *global accommodation* の機能が
あると言う。*global accommodation* とは、前提
が先行情報や会話の背景(*common ground*)に
よって充たされない場合、会話参加者の信念
を会話文脈に順応すべく更新するプロセスを
指す。たとえば、(23)は「太郎がカブトムシ捕
りに行っている」ことを事実として示唆する
が、それは、「知っている」が引き金となって、
聞き手の信念に「太郎がカブトムシ捕りに行
っている」という情報が新規に付加され、会
話の背景が更新(update)されるからである。

(23)花子は太郎がカブトムシ捕りに行ってい
ることを知らない。

*Accommodation*には *local accommodation* と呼ば
れるものもある。これは、‘rather like adjusting
the context only for the immediate purpose of
evaluating the constituent sentence...’ (Heim
1983)と言われるように、会話の背景を更新す
るものではない。Chemla and Schlenkerは、*too*

には *local accommodation* の機能がないとされ
ることから、この *too* の特性を使えば、*left-right
asymmetry* が前提の投射のコアな特徴である
かどうかを、検証できると主張する。たとえ
ば、*too* が *If p, q* の後件に生起する (24a) の規範
的な語順では *p* が前提されることが予測でき、
他方で、*If p, q* を逆転させた *If not q, not p* の前件
に生起する (24b) の非規範的な語順では、*q* が
前提されることが予測できる、と言う。なぜ
なら、*too* は *global accommodation* だけを行う
ので、(24b)のように、前提のトリガーである
too(=*aussi*)を前件 *not q* に置けば、後件 *not p* を前
提とする読みが強制され、*left-right bias* を乗り
越えることができるからだ、と Chemla and
Schlenker は述べている。

- (24)a. Ann’s brother won’t decide to study abroad,
or Ann too will make a stupid decision.
b. Ann too will make a stupid decision, or
her brother won’t decide to study abroad.

ここでのポイントは、(24a)同様、(24b)におい
ても“to study abroad” = “a stupid decision”とい
う解釈が成り立つかどうか、ということであ
る。Chemla and Schlenker では、(24b)でもこの
ような解釈が可能であるものの、前提の引き
金である *too* が後件に生起する (24a) よりも多
くのコストを要する、との結果が示されてい
る。

しかし、同じ議論は、(24a,b)を日本語に置
き換えると成り立たなくなる。

- (25)a. 太郎が留学を決心しようとしなにか、花
子も愚かな決定をしないかだ。
b. 花子も愚かな決定をするか、太郎が留
学を決心しようとしなにかだ。

そもそも(25b)に「愚かな決定をする」＝「留学を決心する」という解釈ができないからである。

このことは、日本語の「も」が、*too* とは異なり、規範的語順にのみ生起して、*left-right asymmetry* をコアな特徴とすることを示唆している。先程、「P かもしれない」では $Q \vee P$ という命題の選言が「か」によって導入され、(制限節項として)「も」の前提を構成すると述べたが、これは、*left-right asymmetry* に重なる部分である。一方、Szabolcsi が主張する(17)(18)(19)を「P かもしれない」に適用すると、<「か」と「も」は、[[Y]]を介して、裏返しの関係にあり、どちらも [[Y]]を前提とする>という点において、「か」と「も」は *symmetric* な関係を有するということになる。しかし、統語的には、等位構造が前提を構成することになり、*symmetric* であっても *asymmetric* であっても、左から右へと前提が投射される点では同じである。

ただし、*symmetric* な関係が成立する場合、解釈できない不自然な連結が生じる場合がある。このような例は、*left-right asymmetry* が前提投射のコアな特徴ではない可能性を示唆する点で問題となる。次章では、これらの例について *left-right symmetry* が内包する問題を吟味していこう。

5. 語順と *left-right (a)symmetry*

従来、ある表現 E の前提は、先行情報から後続情報に投射されるという *left-right asymmetry* をコアな特徴とされている(Stalnaker, 1974)。(26) (27)の a と b の対立はその例である。

(26)a. Moldova is a monarchy and the king of Moldova is powerful.

b.#The king of Moldova is powerful, and Moldova is a monarchy.

(27)a. John is in Paris and he is staying near the Louvre.

b.#John is stayig near the Louvre and he is in Paris.

(26a)では、後続節に生起する定冠詞付き主語“the king”を「Moldova は王国である」という前節と関係づけることができる。しかし、(26b)では、Moldova が王国であるという記述が後続節にあるために、前節に現れる“the king”はその前提を充たすことができない。これが不自然さの理由である。これに対して、(27b)の不自然さの理由は少し異なり、前節から後続節が伴立されるとは限らないことに求められる、と Chemla & Schlenker(2012)は述べている。

しかし、(27a)の文としての自然さは、and を別の等位接続詞 or に置き換えると取り除かれる。

(27)'# John is in Paris or he is staying near the Louvre.

また、(28a,b)が示すように、左右/前後が *symmetric* な関係にある節が「か」で等位接続される場合には、「フランスで過ごす」と「パリで過ごす」の生起順序に関わりなく、不自然な連鎖になる。

(28)a.#休暇をフランスで過ごすか (あるいは) パリで過ごす{かだ/かもしれない}

b.#休暇をパリで過ごすか (あるいは) フランスで過ごす{かだ/かもしれない}

以上のことから、(28)の a と b の不適格性は、純粋に統語的な等位構造の制約でも、left-right asymmetry の有無でもなく、何らかの意味的な要因による可能性があることを示唆している。

Szabolcsi (2015) によると、Hurford(1974) が選言には次のような制約があることを指摘している、と言う。

(29) A disjunction *A or B* is unacceptable if A entails B, or B entails A.

A or B は、A と B が相互に含意し合う場合、容認されない、とするものである。確かに、(28a,b)の「パリ」と「フランス」は相互に含意し合う関係にあるように思われる。しかし、事実はそうではない。

- (30)a. *She is not requesting jewelry and anything expensive.
b. She is not requesting jewelry or anything expensive.

(30)の“ jewelry”と“ anything expensive”は相互に含意し合う関係にある。しかし、上の Hurford(1974)の予測に反して、連言の(30a)は容認されないが、選言の(30b)は問題なく容認される。要するに、(28a,b)は、統語構造とも left-right asymmetry の有無とも、さらには命題間の含意関係とも関係がないということである。では、(28a,b)が不適切な要因はどのようなものなのだろう。

6. 直近のより大きな文脈

Left-right symmetry を示す(28a, b)の不適格性の要因を探るために、統語構造、left-right bias、命題間の含意関係という側面を吟味した。

そこで今度は、Szabolcsi が提案している、ホストおよびホストと交替可能な命題が下限となる Y の設定可能性という「KA」の認可条件について検証する。

3.2.2 では、花子と太郎から成る世界で(20)が成立する条件は、[[花子が来る]]と[[太郎が来る]]を下限とする(21a)の [[Y]]の設定可能性であり、[[花子が来る]]と[[太郎が来る]]を上限とする(21b)の [[Y]]の設定可能性ではないことを見た(以下に再録)。

(20) 花子か太郎が来る

(21)a. [[Y]] = [[(Hanako comes)]] ∪ [[(Taro comes)]]
= { Φ , {h~t}, {ht}, {h~t, ht}, {t~h}, {t~h, ht}}

b. [[Y]] = [[(Hanako comes)]] ∩ [[(Taro comes)]]
= { Φ , {ht}}

(21a,b)を考えると、「KA」の認可条件は選言命題がその下限となる(21a)の [[Y]]であり、上限となる(21b)の [[Y]]ではない。同様に、(28a,b)でも、「フランスで過ごす」と「パリで過ごす」は交替可能な関係にはないので、認可されるためには、この2つのホストを下限とする(31b)の [[Y]]ではなく、<X: フランスのパリ以外の都市>をもう一つの下限とする(31a)の [[Y]]が本来要求されなければならない。つまり、元々(28a,b)は symmetric な例ではなかった、ということである。少し強い言い方をするなら、(28a,b)は「フランスで過ごす」を上限とする(32)のような、ありえない [[Y]]を要求するような性質の選言なのである。

- (31)a. $[[Y]] = [(vacation\ in\ Paris)] \cup [(vacation\ in\ X)]$
 b. $\#[[Y]] = [(vacation\ in\ France) \cup [(vacation\ in\ Paris)]]$
 (32) $[[Y]] = [(vacation\ in\ France)]$

したがって、(28a,b)を、(31a)の[[Y]]を要求する次のような文に作り直すと、容認度の高い文ができあがる。

- (33)a. 休暇をリヨンで過ごすか(あるいは)
 パリで過ごす{かだ/かもしれない}
 b. 休暇をパリで過ごすか (あるいは)
 リヨンで過ごす{かだ/かもしれない}

以上から、選言の成立条件として、3.2.2の議論が有効であることが確認できる。この結果は、同時に、「MO」/「KA」が、ホストを含むより大きな文脈との関係を示唆する形式であるという(19)の Szabolcsi の主張の妥当性を裏付けるものであり、前提の投射構造に関し
 て言えば、少なくとも本論で扱った日本語の選言を含む形式を見る限り、left-right asymmetry をコアな特徴とする、と考えられる。

7. おわりに

本論では、Szabolcsi(2015)の「MO」/「KA」の分析を援用しながら、「か」に「も」が後続するという形式をもつ「P かもしれない」の意味構造がどのようなものかを考えた。「か」と「も」は、そのホストおよびホストと交替可能な命題を下限とする結び/交わりである[[Y]]を介して、裏返しに関係にあり、[[Y]](が

成り立つ文脈)を前提として持つこと、そして、[[Y]]は、直感的には、<直近のより大きな文脈>に対応すると捉えられることを示した。また、「P かもしれない」の意味構造を糸口に、前提の投射構造についても考察を加えた。その結果は、left-right asymmetry を支持するものであり、さらには、Incremental Theory を支持するものだと言えるだろう。

参考文献

- [1]Chemla, E. & Schlenker, P. (2012) Incremental vs. symmetric accounts of presupposition projection: an experimental approach. *Natural Language Semantics*, 20, 177-226.
 [2]Heim, I. (1983) On the Projection problem for presuppositions. *Proceedings of WCCFL 2*, 114-125.
 [3]Hurford, J. (1974) Exclusive or inclusive disjunction. *Foundations of Language*, 11, 409-411.
 [4]岸本秀樹(2012)「日本語の等位節と情報構造」ms. 神戸大学.
 [5]南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店.
 [6]南不二男(1993)『現代日本語文法の輪郭』大修館書店.
 [7]Shimoyama, J. (2006) Indeterminate phrase quantification in Japanese. *Natural Language Semantics*, 14, 139-173.
 [8]Stalnaker, R.C. (1974) Pragmatic presuppositions. In *Semantics and philosophy*, ed. M .K. Muniz and P.K. Unger, 197-214. New York: New York University Press.
 [9]Szabolcsi, A. (2015) What do quantifier particles do?. *Linguistics and Philosophy*, 38, 159-204